



# みどりの風

平成29年5月1日発行  
校報 第541号  
〔みどりの風 第84号〕  
練馬区立関町北小学校

## 木を見る心

校長 大野 泰弘

新緑が鮮やかに映える季節になりました。街中にも、色とりどりのツツジやサツキの花が咲いています。また、冬の間には何もなかった桑の木にも新しい葉が見られるようになってきました。

さて、以前、私が子どものころに京都市にある大徳寺大仙院の枯山水の庭に感銘を受けたことをお伝えしたように記憶しているのですが、アメリカの日本庭園専門誌に、我が国の日本庭園900ヶ所以上を対象に実施した「2016年日本庭園ランキング」が発表され、それによると、日本庭園で第一位に輝いたのは、その大仙院でも、竜安寺でも、桂離宮でも、修学院離宮でもなく、島根県安来市にある「足立美術館」の庭園で、なんと14年間連続日本一なのだそうです。

先月、ある新聞に、この「足立美術館」の庭園を管理していらっしゃる庭園部長 小林 信彦 さん(54歳)の特集記事が掲載されていました。お読みになった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「足立美術館」には枯山水庭を含め、東京ドーム3.5個分の6つの庭があるそうですが、館内の窓枠を額縁に見立てて、それぞれの庭園を眺めると、四季折々の表情が豊かに伝わってきて、借景の自然の山々と調和している様は、まさに「一枚の生きた日本画」のように感じられるのだそうです。そこには、「足立美術館」の創設者である足立全康氏(1899 - 1990)の「庭園もまた一幅の絵画である」という信念が脈々と受け継がれています。

小林さんは、その庭園をほかの庭師6人と共に管理している責任者ですが、6つの庭園にある一木一草一石に至るまで知尽くしている小林さんの仕事ぶりは、例えば、

来館者の立場、目線で庭を見つめ、前日の閉館時間からの僅かな変化にも神経をとがらせている。ほんの少し、変色した松葉一枚、小鳥がミズを食べるために掘り返したコケすらも見逃さない。

翌日の開館時間までに、枯れた葉を全て取り除き、新しいコケを補充する。

マツは一度枝を切り落とすと、そこから新芽が出ないので、ほかの庭師にも伝え、いろいろな角度から、そのマツの5年先、10年先の庭木の姿と庭園全体の調和を想像しながら剪定する。といった具合に、まさにプロの技が至るところに光っています。

小林さんがおっしゃるには、一人前の庭師になるには「10年はかかる」ということですが、当初は、先輩の庭師は何も教えてはくれず、先輩の技を「見て盗む」しかなかったのだそうです。そうすることによって、指示待ちではなく、自らの頭で考え、手も自然に動くようになって、その過程で何よりも観察眼が養われていったということでした。そして、今の足立美術館では、庭師7人だけでなく、ほかの職員も庭園を自分の体の一部のように考えて仕事をされているそうです。

ところで、仕事のジャンルは違いますが、最後の宮大工と言われた西岡 常一 棟梁の言葉に、「棟梁というものは何か言いましたら、『棟梁は、木のくせを見抜いて、それを適材適所に使う』ことやね。木のくせをうまく組むためには、人の心を組まなあきません。木にはそれぞれくせがあり、一本一本違います。山地によって、また同じ山でも斜面によって変わります。まっすぐ伸びる木もあれば、ねじれる木もある。材質も、堅い、粘りがあると、様々です。木も人間と同じ生き物です。今の時代、何でも規格を決めて、それに合わせようとする。合わないものは切り捨ててしまう。人間の扱いも同じだと思います。法隆寺が千年の歴史を保っているのは、皆くせ木を上手に使って建築しているからなのです。」という言葉があります。

庭師と宮大工、仕事の中身は違いますが、小林部長と西岡棟梁の考え方、生き方、仕事ぶりに共通しているのは、「扱う木、見る木のくせ、変化、特徴などをしっかりと見極め、それが全体の中で将来にわたって生かされていくように、できる限りの配慮・工夫をする」ということではないかと思えます。

学校では、いずれの学年も連休明けから本格的に運動会の練習に励んでいくこととなりますが、このお二人の言葉にある「木」を「子ども」に置き換えて考えると、「運動会練習の過程だけでなく、日々子どもたち一人一人の心の声に耳を傾けて、その変化を敏感に、温かく受け止めながら、子ども同士をよりよく結び付け、運動会を含めた学校生活全般の中で、また一人一人の5年後、10年後を見据え、その個性が輝き続けることができるように支援していくことが必要である」という考えに辿り着きます。

5月は運動会に向けて慌ただしい一ヶ月になりますが、一人一人の日々の学校生活や心のあり様にも十分な配慮をしてまいりたいと考えております。